

# MOT 勉強会レポート第 20 回

## 『輪廻転生』

### ～道具としての宗教と科学をいかに使い分けるか～

2017 年 12 月 14 日(木) 開催

## 1. はじめに

「MOT 勉強会」2017 年度の 8 回目は、さる 12 月 14 日(木) 19:00 ～ 21:00、中央区京橋区民館 2 階の 3 号室にて開催された。

講師には、人類学者であり、東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程に在籍中の竹倉史人氏をお招きし、ご講演いただいた。

事前に送られてきた講演案内の記載は、以下の通り。

内 容：NHK 放送文化研究所の調べによると、日本人の 4 割以上が死後の生まれ変わりがあると思うと答えている。この輪廻転生という世界観について紹介し、そこから人類が生み出した宗教と科学という 2 大テクノロジーについて考えてみたい。

竹倉氏は、「輪廻転生」に関する本を出されております。  
普段あまり語られていない内容でありご興味のある方のご参加をお待ちしております。

## 2. 講演概要

事前に配布された資料はなく、講演は竹倉氏の著書「輪廻転生 〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語」(講談社現代新書)など参照しつつ、プロジェクターに映し出されたパワーポイントに従って進められた。

## 2-1 世界中に広がる「輪廻転生」

2008年、国際社会調査プログラム（ISSP: International Social Survey Programme）が、「宗教意識Ⅲ」という調査を行った。

竹倉氏は、この調査をきっかけに輪廻転生をテーマにした修士論文を執筆した。

「宗教意識Ⅲ」の調査は、世界中で行われ、日本ではNHK放送文化研究所が調査を実施した。

その調査の一項目に、「あなたは生まれ変わりを信じますか?」という項目があり、「信じる」と回答した人の上位20の国に絞っても、世界中に広く「生まれ変わり」の観念が支持されていることが見てとれる。

因みに、20番目は、アイルランドで回答率27.1%であった。

上位20位の中だけでも、アジア、北米、中米、南米、ヨーロッパ、アフリカ、一部中東の国々が含まれている。

「生まれ変わり」を宗教の正統教義との関係で見ると、必ずしも宗教・信仰には依拠していないということが判る。

仏教やヒンドゥー教は、その教義の中で説いているが、その他の宗教では必ずしもそうではない。

キリスト教では、公教要義(カテキズム)の中で、「輪廻転生はありません」と明言しているにもかかわらず、上位20位中に多くのキリスト教圏の国が入っており、いずれも先の回答率は3割以上である。

イスラエルのユダヤ人も、ユダヤ教では「生まれ変わり」を説いていないにもかかわらず、上位3番目で53.8%の回答率である。

## 2-2 輪廻転生の3つの類型

ISSPの調査により、「輪廻転生」の観念が、世界中に広く存在し、宗教に拠らず存在することが判った。

逆に「輪廻転生」の観念を表す言葉も複数あり、研究をすすめる上で、言葉の定義をする必要があった。

ISSPの質問用紙は、英語で書かれており、各国の調査では併記して各国の言葉に翻訳されていたので、世界各国でどのような語で言い表されているかの参考になる。

英語での質問表記は、「Do you believe in reincarnation? - being reborn in this world again and again?」であった。

リーインカーネーションは、19世紀フランスで使われて、その後世界に広く使われるようになった言葉であるが、「reborn 生まれ変わり」という語がより普遍的な意味を持つ。

そこで、先ず、「生まれ変わり」のメタ定義を行った後、「生まれ変わり」の類型を3つ見出した。

この3つの類型は、その後 Wikipedia でも採用された。

## ※「生まれ変わり」の定義

主体としての<私>が肉体的な死を経験したあとに、別の身体を持って再生すること

## ※3つの類型

### (1) 再生型

部族や親族などの同族内で転生する循環型の生まれ変わりの思想。時には動物転生や植物転生も見られる。比較的プリミティブなもので、世界中の小規模社会にみられる。(Wikipedia「転生型」より抜粋)

再生型のキーワードは「循環」。死後は祖霊界に赴き、しばらく逗留した後、ふたたび親族内に再生するという考え方。

### (2) 輪廻型

インドで生まれた転生観であり、生まれ変わりを流転として捉える。生物は永遠にそのカルマ(業)の応報によって、車輪がぐるぐると回転し続けるように繰り返し生まれ変わるという考えを意味する。ヒンドゥー教(バラモン教)や仏教、ジャイナ教にみられ、流転として転生を繰り返すことを苦と捉える。(Wikipediaより抜粋)

輪廻型のキーワードは「流転」。

### (3) リーインカーネーション型

19世紀中ごろにフランスで生まれた思想で、人間は生まれ変わりを通して成長すると考える。(Wikipediaより抜粋)

## 2-3 前世の記憶

なぜ、「生まれ変わり」を信じている人が多いのか?

「前世の記憶」がキーワードとなる。

洋の東西を問わず、「前世の記憶」を持つ人々がいた。

ピタゴラス(BC532 - 496)とブッダ(BC6 - 5世紀頃)、ともに前世の記憶を持つと主張していた。

「前世の記憶」には、以下の3つのタイプがある。

- ① 子供が語る「記憶」      📌 当講演で説明
- ② 大人が想起する「記憶」
- ③ 退行催眠による「記憶」

バージニア大学医学部のDOPS (The Division of Perceptual Studies)は、幼い子供達が語る「前世の記憶」が実際の「客観的事実」と合致しているかを実証的に研究している研究機関である。

子供が前世を語る期間はおおむね、2歳10か月 ～ 7歳4か月の間である。

調査方法は、前世を語る子供の情報が入ると、調査員が現地に赴いて、子供が語っている内容が事実と合致するかを検証する。

そして、通常の方法では本人が知りえないような事実を知っていると認められる場合は、聞き取った内容(8頁200項目の調査シート)をデータベース化する。

蓄積されたデータは、2030件に及んだ。

このような調査には、膨大な資金が必要であるが、それを支えたのは「コピー機の父」ともいべきゼログラフィーを開発した発明家のチェスター・カールソンであり、現在の日本円で8億円相当の寄付をしてくれたおかげである。

竹倉氏も自身のフィールドワークで、永年に渡り、子供が語る前世の記憶を集めてきた。

しかし、このような異質の研究に予算がつくことはなく、全て自費で賄ったという。具体的には、英語や数学の家庭教師などのバイトで稼いだ資金をフィールドワークに伴う交通・宿泊費や諸経費に宛てたそうだ。

こういう努力の成果が、「輪廻転生」という書籍に結実していると感じた。

## 2-4 研究の総括、そして宗教と科学

前世の記憶を語る子供の調査は、今はしていない。

理由としては、自分の知りたかったことはほとんど知ることができたから。

また、講談社から本も出版して、Wikipediaにも引用されるなど一定の社会的成果は出せたので達成感がある。

DOPSの研究成果から、以下のようなことが結論できる。

- ①「物理的にアクセスする可能性が著しく低い情報を幼い子供が自発的に話す」は、事実である。
- ②「明らかに有意な水準で、その話の内容が客観的事実と一致することがある」は、事実である。
- ③「②の話は、『前世の記憶』であり、その子供は生まれ変わったと考えられる」は、解釈である。

竹倉氏の考えによれば、DOPSの研究が示唆するものは、

- ①現在の人間には未知の記録媒体・情報伝達経路が存在する
  - ②人間を構成する要素には肉体の死後も存続する「何か」が含まれている
- である。

人間の営みの方向性には、「抽象化による観念の拡張」と「物理的制約からの解放」がある。

DOPSに対峙する考え方は唯物論であり、「人間の観念を物理的実体に対応させなくてはならないという信念」である。

科学も宗教も、モノを見る枠組みであり、道具に過ぎない。それ自身を自己目的化することは回避すべきである。

## 4.所感

「輪廻転生」という異質なテーマを研究対象に選ぶことの難しさについての話が印象深かった。

「輪廻転生」は、科学を信奉する多くの人目に、(竹倉氏の言葉を借りれば)、「荒唐無稽」とか「胡散臭い」と映るであろう。

DOPS設立の大スポンサーが、「コピー機の父」とも言うべきチェスター・カールソンであるというのも興味深かった。

チェスター・カールソン自身の神秘主義的傾向がその寄付の理由に挙げられていたが、もしかしたら「コピー機という当時の革新技術から得た着想で、輪廻転生の仕組みを解明の実現性に期待していたということないのだろうか?

チェスター・カールソンのような革新技術にこだわるイノベーターだからこそ、到達できる「抽象化による観念の拡張」、「物理的制約からの解放」があるのではないかと感じた。

## 5. 参考文献

- ・「輪廻転生 〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語」（講談社現代新書）  
著者 竹倉史人

監修 加藤美治、執筆 石垣純